分類	内容	回答
水遊び	○低学年の指導について	・低学年は、水遊びを通して、水の中で体を動かす楽しさを味わうことを大切にしている。
		・自ら学び続ける力を育てていくためには、「やってみよう」と思ったことを自分で決めて取り組むことを大切にしている。その「やってみよう」という学習課題を達成するために、①どんなことに取り組むのか確認し、②どのような活動を行うのか見守り（だれを参考にするとよいのか、どんなイメージなのか）、③どう感じたかを聞いて、学びのサイクルを何度も回すように支援する。
	○「みんなでゲーム」について	・水遊びの学習課題は、「水の中で体を思い通りに操作する」ことであると考える。低学年段階ではそのために遊びを通して「浮く（もぐる）」「進む」「呼吸する」動きを味わうことができるようにしていくことが大切であると考えている。
知識及び技能	○低学年における技能	・低学年では、水の中を動き回ったり、水にもぐったり浮いたり、息をとめたり吐いたりすることを身に付けることができるようにする。
		・これらをただ反復動作で身に付けるのではなく、不安感を取り除く簡単な遊び方を工夫することで身に付けていくことができるようにした。
	○工夫された動き	・水遊びにおける工夫は、水の物理的特性（浮力・抗力・水圧・揚力）を生かしている姿と考える。多様な動き方を経験し、動きを修正化、洗練化させていく。今回の工夫の観点は数（人数・用具数）、方向、姿勢、速さ・回数とした。
思考力、判断力、表現力等	○低学年における学習課題	・水泳運動系の学習課題は、物理的特性を生かして自分の体を思い通りに操作することである。願いをもち、実現するために活動を選択し、繰り返す。教師はその学びのサイクルの支援をすることが大切であると考えている。
		・子供が水泳運動における願いや思いをもち、それを達成していくために、活動を選択することができるようにした。
学びに向かう力、人間性等	○遊びの自己決定	・子供一人一人が学習課題達成の喜びを味わうことが、次の学習の原動力であると考える。そのためには、自己選択、自己決定、振り返りが大切であると考える。
		・子供一人一人がやりたいと思い、やったことを通して、もっとやってみたいと思うことが大切である。子供のよさを認め、自信を深めていくように称賛していく。
苦手な児童への対応	○顔付けの指導について	・1年生の時から顔を無理に付ける活動は行わない。（息をとめて行うなどの指導は行う）友達の動きを見て、やってみたいと思うことが大切である。自分からやってみようと思い、取り組むようになる。
		・無理やり顔を付けるのではなく、顔を付けたらこんな楽しいことがあると知り、やってみようと思うようになる。顔を付けられない子供も、水に使っているところから水がかかり、自然と抵抗感がなくなっていく。
		・1年生における顔付けの指導は、息を吸って止めること、顔を上げたら息を吐くことを行う。これらの動きは、リズム水遊びを通して繰り返し行い、身に付くようにしている。
中学年・高学年への接続	○泳法の指導	・低学年においては、泳法を意識しない。泳法につながる動き方を指導するほど、水泳運動系の指導は敬遠されていく。ただ、浮きながら手足を使って進む動きは多く見られ、それを見た児童が真似をしている姿が見られる。低学年段階では、遊びを通して水の物理的特性「浮力」「抗力」「水圧」「揚力」を十分に味わうことを大切にしている。
	○低学年のゴール	・水遊びを通して、「浮くために、力をぬくこと」「息を吸うために吐くこと」「進むために、抵抗を感じること」を運動を通して知り、楽しむことがゴールであると考えている。十分に遊び込み、できた動きを組み合わせて次のめあてを立てることが3年生以降の学習につながっていくと考える。
	○評価の考え方	・水泳運動系の評価となると、どうしても何メートル泳げたといった技能面ばかり意識されてしまうが、低学年では不適切である。大切なことは、評価は目的ではなく、子供の力を伸ばすために行うものであると考える。
		・各時間全ての児童に対して3観点全て見取るのは難しいである。重点を決め、ねらいに即した言葉がけを行っていく。

評価・教師の支援について		・教員は個々の個々の学習課題を把握して指導にあたります。学習課題の確認、運動の振り返りについて各時間の重点を踏まえて支援していく。
	○学びの停滞	・学びの停滞の場面は次のように考えている。これらが身らえた場合は、教師は積極的に支援する。 ①自分がやってみたいと思うことが考えられない。 ②設定した学習課題と選択した学習課題が乖離している。 ③学習活動後の振り返りなく、別の活動に取り組んでいる。
	○評価の分担	・複数教員で指導に当たる場合、担当の場を決めて指導すると評価しやすいと考える。そのためには、複数教員が本時のねらいを共通理解しておく必要がある。
場の設定	○各活動について	・それぞれの場はつぎのようなねらいで設定している。 A　ビート板遊び（進む・浮く） B　いかだ遊び（浮く・進む） C　輪くぐりあそび（もぐる・呼吸・進む） D　もぐり・浮き遊び（呼吸・もぐる・浮く・進む）
	○もぐり・浮き遊び	・もぐり・浮き遊びは、用具がないため、遊び方を子供たちが考える。そのため教員は、子供たちの学習課題を把握し、適切な言葉がけを行う必要がある。
安全面	○指導体制	・緊急時のために3名以上で指導する。主となる指導者（全体指導）、個別指導、安全管理を分担して指導する。安全管理の1名が、主となる指導者の対角線上に位置することで全体を把握することができる。教員の分担を場所で区切るなど明確にすることで、全ての児童の安全管理を行うことができる。緊急時は、全体への指示、児童の救護、連絡に分かれて対応する。